こーひーぶれいく

# 神域からの贈り物

榊　泰直
*Sakaki Hironao*

東日本大震災から２か月後，私は福島第一原発の放射線量を測定するため，帰還困難区域内に派遣された。第一原発の近くの田んぼの真ん中で，飼い主に放たれた牛が，何事もなかったようにのんびりと草を食べている姿を見た。人の手で築かれた科学技術が，ほんの一瞬で自然の営みを壊してしまった。その現実は，私の胸を深くえぐった。それ以来，私は自然と共に生きる術を考え始めた。特に心を惹かれたのが「循環型農業」だった。除草剤ではなく，雑草をヤギに食べてもらうような暮らし。それは私の心の奥底に静かに根を張り，やがて強い願いへと変わっていった。

時が流れ，コロナ禍で社会が止まり，日本中が不安に包まれる中，自宅待機による気分転換と運動のために私は夜ごと奈良・生駒山にある宝山寺へと足を運ぶようになった。昼とは異なる静けさに包まれた石段を一段ずつ踏みしめながら，「いつかヤギと暮らす生活が実現できますように」と，現世利益で名高いその寺に手を合わせ，私は将来への希望を託していた。

2020 年 4 月 7 日の夜，満開の桜が宵に浮かぶ中，いつものように参道を登っていたそのとき，宝山寺の方から何かがゆっくりと下りてきた（**写真 1, 2**）。なんと，黒くて大きな角を持つオスヤギだった。思わず「マジか？」とつぶやいたのを覚えている。首輪をしていたことから飼いヤギだと分かったため，警察に連絡して保護してもらった。

後日，このヤギは近所のお蕎麦屋さんが除草用に飼っていた「ナッティー君」で，脱走していたことが判明した。けれど私には，あの夜の出来事が偶然だとは思えなかった。まるで宝山寺に祀られている聖天さまがこう語っているようだった。「君があれほど願ったのに，ヤギを飼わないなんてこと，ないよね！？」と……。

**写真 1　階段を下りてきたヤギ！**

**写真 2　宝山寺までヤギがエスコート！？**

私はその声に従った。知人の土地を借り，オスとメスのヤギを迎え，週末ごとに荒地を耕し畑へと変えていく暮らしを始めた。

このヤギたちには，宝山寺に寄贈された石碑に刻まれていた春にちなんだ名前をいただいて「春蔵」と「小春」と名付けた。相性の良い夫婦で，1 年足らずのうちに 2 度出産し，4 頭の子ヤギが生まれた。更にその子たちも出産し，計 8 頭の新しい命に恵まれた。子ヤギたちは梨や栗の畑の除草要員として，兵庫や愛知の農家に里子に出ていった。

ヤギを飼って気づいたのは，除草だけではなく，地域社会にも思わぬ効果があることだ。ヤギに餌をあげようと，大人も子どもも自然と集まり，触れ合いの場が生まれる。それが地域のつながりを育んでくれるのだ。私も，まるで昔からそこにいたかのように地元の人に迎え入れられた。最近では大阪の自治体から除草支援の依頼もあり，この夏はヤギを派遣する予定だ。きっとそこでも，草を食べるだけでなく，人と人の心をつなげてくれるだろう。

ヤギたちと過ごす日々の中で，私は多くのことを学ばせてもらっている。すべては，あの夜，神域からの階段を下りてきたヤギとの出会いから始まったのだった。

（量子科学技術研究開発機構）